
IS<インフィニットストラトス> ~ 漆黒の使い手 ~

あさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>インフィニットストラトス< 漆黒の使い手

【Nコード】

N00540

【作者名】

あそぎ

【あらすじ】

ISを乗りこなす事が出来る2人目の男子がIS学園に現れた。

その吉報に加え、臨海学校というイベントが迫っていたクラスは大盛り上がり。

だが、その臨海学校に迫る影が

突然現れた男子の正体は一体何なのか

そして一夏達は、臨海学校を無事に終えることができるのか

基本的に、ダブルヒーローみたいな感じで進めていきたいと思っています。

また、原作にはないオリジナルなストーリーも入れてみたいなあとは思っています。

ですが、勉強という苦行が……

早い話、更新は遅いです、有り得ないくらい遅いです。

大事な事なので2回言いました

こんな作者ですが、それでもお付き合いして頂きたいと思っています。

1話 旅立ち（前書き）

インフィニットストラトスの二次創作物です。

主人公はオリキャラですが、もちろん一夏やその他大勢のヒロインも登場します。

時系列は三巻辺りから始まります。

つたない文ですが、読んで頂ければ幸いです。

1話 旅立ち

「……やっぱり行くのね」

沈んだ声が、今まさにドアを開けて外に出ようとする”彼”にかけてられた。

少し驚いた。

今は夜中、もう2時をまわった頃だろう。

もうとつくに寝ているはずの時間だ。

そもそも、その時間を狙ったのだ。

「ああ」

あくまで素っ気ないそぶりで返事をし、その声の主を見るために振り返る。

そこにいたのは、1人の少女。

年は端からみれば14、5あたりに見えるだろう。

背は自分より頭1つ低い。

腰のあたりまである長い、サラツとした黒い髪。

そして何よりも印象的な大きな瞳。

その瞳は、今は潤んでいた。

「どうして……ううん、どうしても行くのね？」

「……………」

日本を出てからもう3年、毎日のように顔を合わせた少女。

重圧から逃げ出し、自暴自棄になっていた自分に、唯一手を差し伸

べてくれた少女。

自分に、楽しい日常を教えてくれた少女。

その少女を、自分はたった今裏切ろうとしている。

「はあ〜。 またそんな顔を、全く……何のために私がこんな時間まで起きていると思ってるのよ」

少女は唐突に、声色をいつもみたいに戻し、大げさにため息をついた。

「……は？」

「どうせ顔を合わせずに出て行こうとするに決まってるから、見送りしようと思ってたのよ」

一瞬ぽかんとしてしまう。

だが、その言葉を理解すると同時にため息がで、肩の力が一気に抜けるのを感じた。

「お前にはお見通しだったわけだ」

「当たり前でしょ」

「だよな」

あはは、とお互いに笑い合う。

そして

「じゃ、行くな。元気にしてるよ？」

「も、もちろんですよ。そっちなこそ頑張ってきなさいよ？」

「ああ、じゃあな」

そう言つて、ドアを開けて外に出た。

「まったく……世話の焼ける……」

ぶつぶつ文句を言い続ける。

でもこれで良かったのだ。

彼が過去から抜け出やすい機会。

その為に、私は要らない……。

少女の頬に1つ、雫が流れた。

「あれ？ どうしてだろう……」

彼と過ごした日々を思い出す。

楽しい時間だった。

時には喧嘩だった。

それでも、この3年の思い出はとてもあたたかく……

「涙が……止まらない……っ……よ……」

彼には行つて欲しくなかった。

まさしくこれが本音だった。

だが、彼に伝えることは出来なかった。

「……つく……ひつく……」

「いやあ、俺としたことが……って、どうした？」

「えっ!？」

突然の登場に、慌てて涙を拭い、彼に訊く。

「ど、どうしたのよ？」

「あ、忘れ物してしまって……」

はは……と、ごまかすように笑う。

全く……本当に世話の焼ける……。

「で、何をわすれ」

彼の唇が、私の唇に一瞬触れた。

「えっ……」

「じゃあな、柚夏」

呆然としている中、彼は颯爽と出て行った。

…… 5分ぐらいたっただろうか。

ようやく落ち着いたようだ。

さっきの感触を確かめるように唇に手を当てる。
そして

「私のファーストキスだったのに……バカ」
若干赤い顔でそう呟く。

「頑張りなさいよ……龍也」

その呟きには、もう悲しみはなかった。

2話 転入

「うう……」

授業が終わり、昼休みになった。

だが、正直動く気が湧かない……というか……

「疲れた……」

別に授業を受けたから、という訳ではない。

クラスの皆からの怒涛の質問責めに遭ったからだ。

毎回休み時間に逃げていては体がもつはずもなかったから、仕方なく対応してたらこの状態だ。

我ながらなさけない……。

（というか俺、柚夏以外の女子とはあまり話さなかったっけ……）

8

と気づけば、今は近くにはいない柚夏の事の考えに浸っていた。
重傷である。

そのまま意識が夢うつつをさまよおうとした時

「ほらっ、昼飯食べに行こっぜ」

腕を掴まれてずるずる引きずられていくではないか。

引きずる正体は言わずとした織斑一夏である。

うん、男子が他にいないからわかりやすい……って、そんな事はど
うでもいい！

「ちょ、待て織斑っ。なにすんだよ」

「なにつて、学食に行こうとしたただけだけど？」

不思議そうに首を傾げる織斑。

「腹減ってないからパス」

転入初日からの騒ぎで全然食欲がない。

というより寝たい。

「バカ言っな、三食食べないと体に悪いんだからな、ほら行くぞ」

「だから」

「い、一夏っ！」

文句を言おうとして、誰かに遮られてしまった。

「お、箒。どうした？」

箒と呼ばれた、ポニーテールの少女。

いつもなら少し不機嫌そうに見えるであろう目はうるたえていて、明らかに緊張していた。

しかも顔が若干赤いのは……風邪か？

「い、いや、大した用事ではないのだがな、一緒に弁当でもどうだ？」

さらに顔を紅潮させて言う箒……さん？

この態度を見てある考えが閃いた。

これは使えるっっ！

「織斑、ほらせっかくのお誘いをむげに断るなんて男がすたるぜ！

俺なんかほっとして2人で行ってこい！」

ここは篝さんの援護射撃をする。
これが上手くいけば篝さんの願いも叶い、俺も寝られる、まさに一石二鳥！
だが、現実はその甘くはなかった。

「うーん……、そうだな」

「一夏っ」

「みんなで一緒に屋上で食べるか、おーい……って、なにやってんだ？」

ギクツ ギクツ ギクツ

おおー、聞き耳をたてていた4人がいつせいに反応したぞ。

「わ、私は別に」

「あ、あはは……」

「お前は私の嫁だろうに……勝手に……」

「あ、アンタには関係ないでしょ！」

皆それぞれ思いのままに返す……若干変な単語が混ざっていた気がするがつつこまないでおく。

「まあいいか、皆で屋上で弁当食べようぜ。もちろん薬屋も一緒に」
「はっ!?!」

この朴念仁、事態を最悪な方向に進めてくれたぞ。

「ま、待て、どうしてお前はそんなに鈍感なんだ!?!」

今さっきの篝さんの態度を見れば一目瞭然だったはずなのに!?!

その篝さんから殺気を感じるのは……気のせいだと思いたい。

「？ 何言ってるかわからないけど……そうだな、みんなで弁当買
いに行くか」

「そもそも俺は行くとは一言も」

「一夏、ボクもお弁当があるんだけど……」

「じ、実は私も……」

「うむ、私もお前を誘おうと思ってな」

などなど、なんと全員が弁当を持っていたという。

なんだこの無駄な偶然の一致。

「そうか……、なら俺もないから一緒に買いに行く」

「私がお前の分は作ったから！」

「薬屋くんにはボクが教えるから！」

「早く行くよっ！」「」

「は？ 何をそんなにっ、や、やめろって」

おうおう、なんてコンビネーション、あっという間にシャルロット
さんを除いた全員が一夏を引っ張っていく。

そんなに俺と一夏を2人きりにしたくないのか……

……なんか変な想像をしていそうなのでっつまないでおく。

俺は女子にしか興味はないですよ、うん。

それはともかく、俺はその一部始終をポカンと眺めているだけだっ
た。

……。

「そ、それじゃ、行くっか」

律儀に残っていたシャルロットが声をかける。
俺はその場で出来たのは、大きなため息だけだった。

2話 転入（後書き）

.....

完全に始めるタイミングを間違った……

そんな後悔をしているあさぎです。

ちなみに間違ったのはリアルと小説内の書き始めた時期です

リアル：テスト期間

小説：全ヒロインのフラグが立った後の3巻

Q・先生……、フラグを考えるのがつらいです……………。

A・勉強なさい。

はいそうですねごめんなさい僕が悪うございました

いっそのこと原作ヒロインはこのまま一夏 を突っ走ってもらって

……

ま、今の所は白紙です、はい。

あと、こんな拙い小説を読んでくれる読者の皆様、ありがとうございます

います。

出来ない僕にアドバイスまでして下さる人もいて、感謝感激です

それでは、これからも読んでいただければ幸いです。

3話 日本代表候補生

「でさ、どうしてこのタイミングで転入なんてしてきたの？」

一通り自己紹介も終わり、みんなでワイワイと会話してるなか、ズバツとなんの躊躇いもなくそんな事を訊いてくるのは鳳鈴音。ツインテールが（あと1つあるけど本人の為に言わないでおう）特徴的なやつだ。

しかしなんてデリカシーの無いやつなんだコイツ。

後ろめたい事があつたら場合の嫌な空気、どうするんだ。実際はないけど。

「……………」

周りを見れば、皆が俺に注目していた。

どうやら気になっていたらしいけど、遠慮して訊かないでくれたらしい。

うん……………、ま、いいよな。

隠してもバレるんだし。

「それでも、日本の代表候補生なんだぜ？」

出来るだけ軽い口調でいう。

……………

なんだこの嫌な沈黙は……………。

「うっ」

ん？

「……嘘だっ！」「……」

「訊いておいて酷くないか！？」

ひ らしの真似をされても困る。

ちなみに俺はひぐ しよりうみ こ派だ。

そんな派閥は聞いたことないけど。

「えっ……だって……」

シャルロットが恐る恐る続ける。

「男の子……だよね？」

「え！？ そこを疑問に思われるのはかなり心外なんだが！？」

自分のような姿で実は中身が女子だったなんて人に出会ったら、俺の精神は果たして耐えられるだろうか。いや耐えられない！仮に、本当に仮に、女装したとしても、似合うという事はないはずだ、ないはずなんだ……っ！

これ以上変な妄想をされたら俺の精神が折られそうなので、言葉を続ける。

「ISに乗れる2人目の男子の一夏が現れたからな、男子でもISに乗れる奴がいる可能性がある」と世界が判断したかららしい」

「ん？ 一夏が1人目じゃないのか？」

箒が至極当然の疑問を投げかける。

「ま、事情が事情で……というか、箒口令がしかれてて公表されなかつたんだよ」

「へ、へえ、そうなんだ」

相槌をうつシャルロット……未だに若干顔が赤いけど……一体何を想像したんですか……。

「って事は龍也も専用機があるのか？」

一夏がついで訊いてくる。

「確かにそれは気になりますわね、日本で有名なのは訓練機にある打鉄ぐらいですし」

セシリアもそれに乗ってくる。

いかにも貴族つて感じのブロード美少女だ。

ふう、話題がいいように逸れた、グッジョブ一夏。

「まあな。でも、当たり前だけど今出すわけにはいかないからな、それはまた今度ということ。ま、待機状態はこんなのだが……」

俺は腰にぶら下げている剣帯から、短剣を引き抜く。

長さはせいぜい15センチ程度。

左右対称の刃から柄まで全て黒、そのせいで目立たないが、柄には黒い水晶が埋め込まれている。

一応言っておくと、アクセサリーの類ではない。

。「ふむ、ダガーか」ラウラが形状を見ただけ、そう言った。見た目は、眼帯をしているとはいえ銀髪の美少女だが、このあたりはさすが軍人と云った所だ。これ、最近ナイフと同じにする人が多いというのに……。

「え、ナイフじゃないの？」

ここにもいた。

「ダガーはな、左右対称の両刃の短剣の事を言うのだ。ナイフは片刃だろう」

代わりに説明してくれるラウラ、ありがたやありがたや。

「ま、正確にはミセリコルディアって言うけど、実質ダガーとあまり違いはないな」

使い道が違う程度の話だ。

「へえー」

感心したように短剣を眺める鈴。

そんなに珍しいか……？

「って、それはアクセサリとは言わないだろ……」
せつかくの説明に水を差す一夏。

「一夏はガントレットだろ？ 他人の事は言えないだろ」
「だよな……何で男子はマトモな物じゃないんだ……」

「それは俺が訊きたい……」

「「はあ……」」

あれ、なんでこんなテンションになったんだ？

「ふ、2人共、ほら、元気出して、カツコイじゃない」

必死にフォローするシャルロット、苦勞人だな……。

キーンコーンカーンコーン

ん？

このチャイムって……

「次実習じゃねえか!？」

もちろん教師は鬼こと織斑千冬である。

遅れれば即ち

『死』

だ。

そんな事を考えている間にも、皆驚くべき速さで去っていく。

「ちよっ、皆待てよっ!」「悪いな龍也、犠牲と塩分は最小限でいいんだ」

爽やかスマイルで返す一夏。くそっ、なんだやけにムカつく。

「ええいつ、遅れてたまるか！」

一気に階段を降りていく。

間に合え……間に合え……っ！

4話：実力……は？（前書き）

最近忙しい……（、）

4話：実力……は？

パシーン！

澄み渡る青空に響き渡る出席簿アタックの音。

くらっていたのは龍也だ。

ああ、転入初日から……可哀想に。

一夏は心の中でそつと呟いた。

最近思っている事がよくバレるから、あまり意味はないが。

「そつだな……」

ん、千冬姉が何か考えてる……なんだ、罰ゲームか？

すると千冬姉はニヤリと笑って言った。

「お前ら、日本代表候補生の実力を見たくはないか？」

「ちよつと待つてください」

沈痛な面もちで待ったをかける龍也。

その後、2人で少し言葉を交わしていたが、龍也がため息をついて会話を切った。

龍也、お前本当に大丈夫か……？

「というわけで、本人もやる気だからな」あの顔のどこにやる気があるのかはわからない。

だが、まわりが反応したのはそこではなかった。

「え？代表候補生って……」

「まさか薬屋くん……」

「男子なのに!？」

まわりの女子ズが一気に騒ぎ出す。

それはまあ……確かに驚くだろうけど。

「あー、いちいち騒ぐな。時間の無駄だ。専用機持ち、織斑以外でだれか相手しろ」

「な、なんで俺以外!？」

この判断は不当だ、即刻異議を

「お前では相手にならないからだ」

うわっ、はつきりとダメ出しされた……。

実を言うと、結構やってみたかったりする。

日本の代表候補生という事もあるし、なにより男同士でやってみたい。

困惑しているのは俺だけではなかったようで、

「はあ、やれというのならやりますけど……」

「ええっと……誰がやる?」

「そっね……」

「……」

セシリア、シャルロット、鈴とあまりやる気ではないみたいだし、ラウラに至っては無言だ……。

やっぱりここは俺が

「アイツにいい所を見せるチャンスだとは思わないか？」

「「やりますっ！」」

おおっ！？

なんだ？ 一気に4人の闘志に火がついたようだ。

なんだ、飯でも奢ってくれるのか？

……って、前もあつたなこの展開。

まあ、何にしてもやる気があるのは良いことだ。

人間この年で無気力なんて不健康だ。なんて事を考えているうちに、いつの間にかジャンケンでシャルロットが勝っていた。

「えへへ。一夏、頑張ってくるね」

「お、おう。頑張れ」

ニコニコしているシャルロットに、何故か気圧されて、そう返事するしかなかった。

なんだ？ 今、鬼気迫るような感じがしたぞ。

そこまで気合いが入るなんて、千冬姉は一体何を言ったんだ。

とりあえず龍也とシャルロットを除くみんなは、アリーナの観客席へと移動した。

別れる間際に見た、龍也の引きつった顔がやけに印象に残っていた。何か引つかかるものがあったが、はつきりしないので、とりあえず心の中で思った。

「ご愁傷様。」

観客席に行く一夏の顔ははつきりと

「ご愁傷様」

と言っていた。

あの野郎、他人事だと思いやがって……。

第一、俺はここ数年ISに乗ってない。

色々わけありで、国外にいたのが原因なんだが……さて、どうしようか。

「よろしくね、龍也」

手を出してくるシャルロット、その顔は笑顔だが、目の奥は笑っていない。

明らかに真剣そのものだ。

「あ、ああ………」

こちらからも手を出して握手する。

いくら怖いとは言え、礼儀はしっかりしないとな。

「始めるぞ、位置につけ」

織斑先生の声がかかり、俺もシャルロットもその通りに位置につく。そこからお互いにISを展開する。

俺はミセリコルディアを抜き、片手で構える。

ドクン……

久々にISを使う。

今の鼓動は緊張か、はたまた血の騒ぎか。

本気で戦う気はないのに、気分が高揚しているのがわかる。

気づけばシャルロットは既に展開を終えていた。

しかし、慌てる事無くゆっくりとミセリコルディアを構え、心の中で呼ぶ。

（始めるぜ、黒天！）

瞬間、ISが展開される。

静寂が訪れる。

それを断ち切るようにブザーが鳴り響く。

それが戦闘開始の合図だった

5話・龍也VSシャルロット(前書き)

元々戦闘描写が苦手で

しかも、なぜかかなり焦って書いたので、稚拙な部分丸出し感があります

ご了承下さい(´_`)(´_`)<

5話・龍也VSシャルロット

そこにいたのは「黒」だった。

他には何も無い、ただ広いだけの部屋。

そこにポツンと、しかし存在感を確かに示しながら、直立していた。

IS「黒天」

どこか工業的な凹凸のある、まさにロボットといった感じの機体だ。

しかし、その場に居合わせている子供、まだ12歳ぐらいであろう彼には、それが何かはわかっていない。

だがそれにも関わらず、彼は何の迷いもなくそれに近づいていく。

まるでそれに引きつけられるように。

そしてそれを触った瞬間

世界は一変した

戦いは一進一退の攻防が続いている。

龍也が、ISの武器としては珍しい、短剣二振りを振るい、シャルロットに攻撃をしかけようとする。

しかし、流石はシャルロット。

小型ライフルを連射し、簡単には近づけないように牽制をしつつ、隙をみては直ぐに大口型拳銃を呼び出して攻撃する。

龍也はなかなか攻め倦ねている、が、それでも互角と言って良い。

時折、龍也の剣が機体をかする場面がみられる。

一夏はその戦いを見て、思わず息を呑んでいた。

(龍也は近接武器しか使っていない……しかも俺の雪片式型よりも一段と短いあの剣で……)

相性は確実にシャルロットの方がいい、剣では届かない距離から一方的に攻撃出来る。しかし、龍也は一定距離を保ったままついている。

あの距離にいれば、十分に射撃武器の特性を生かす事は難しいだろう。

だが、それもあの操縦テクニックがあるからだろう。

自分に来る弾だけを、流れるように確実に叩き落としていく。

(俺も、あのぐらい強くなれば……)

いつしか、拳を握りしめていた。

しかし、一夏が思っているほど龍也が優勢という訳ではなかった。

「くそっ」

思わず声に出してしまう。

動きが、自分の思った通りにいかない。
完全に体が剣を忘れていた。

しかも、その隙をシャルロットは見逃してはくれない。
的確にその隙に撃ち込んでくる。

（流石にこんな状態で押せるほど、代表候補生は甘くないというわけだ）

今はなんとか弾いているものも、このまま根気比べをするのも面白くない。

といつても、普通に引くのでは負けた気がする。

（仕方ない、少し無理をしても一撃当てて後退するか。距離が取ればこっちのものだ）

自分の得意な超遠距離戦に持ち込むための算段を立て始める。

最初の適当な気持ちは既に頭にないようだった。

適当なところで黒天を後退させた。

意表を突かれたのだろうか、シャルロットは次の行動に迷ったのよ
うに動きが少し鈍った。

(今だ！)

すぐさま瞬時加速を行い、一気に距離を詰めて斬りつけ

空を切った。

「え？」

我ながら思わず間抜けな声を出してしまった直後

カチャッ

すぐ横にシャルロットがいた。

しかも突きつけているのは第二世代最強と謳われた……

「……盾殺し>シールド・ピアース<……」

やっと悟った。

完全に読まれていた、と。

「これで終わりだね」

シャルロットが、ニコリと笑う。

その笑みはまるで無慈悲な天使の宣告のようで

ズドオオンッ

辺りが真っ白になった

「龍也!？」

「落ち着け、馬鹿者」

思わず身を乗り出してしまいそうな所を、千冬姉に抑えつけられる。その間にも、龍也に二発目、三発目が撃ち込まれていく。シャルロットの盾殺しは、リボルバー式で、連射が可能になっている。ラウラのISさえ、あれには耐えられなかったのだ。龍也も

「アイツは大丈夫だ」

「えっ?」

ほとんど確信しているような口振りの千冬姉。

一体……

「私が直に手解きしたんだ、そう簡単に負けてもらっては困る」

そう言う千冬姉の視線の先には、漂っている煙の中で、確かに立っている黒天の姿があった。

決まった。

シャルロットは盾殺しを撃ち込んだ瞬間、そう思った。

(流石の代表候補生でも、これをマトモに受ければ……)

ところが、二発、三発と撃ち込んでいくと、違和感を感じた。

(これは一体……何だろ……?)

盾殺しから伝わる感触が、どうも変なのである。

(何か硬い物に撃ち込んでいるような……)

しかも、それを破壊出来ている感じでもない、むしろ……

(弾き返されてる!?!この盾殺しが!?)

そして全て撃ち終わり、シャルロットは距離を置いた。

未知の感触に危機感を抱いたのだ。

そして、龍也の乗る黒天を覆っていた煙が少しずつ消えていき、そこにあったのは

無傷の黒天と、それ全体を覆う半透明で薄い赤色をした、盾だった。

いや、盾と呼ぶべきなのかどうかも疑わしい。

しかしながら、それを展開するような時間をシャルロットは全く与えなかったはずなのに。それこそ、ラピッド・スイッチの並みに早く展開する必要があった。

「いや〜……、流石に今のはビビった」

開放回線>オープン・チャンネル<から聞こえてくる龍也の声。

「今ので終わったと思ったんだけどね……」

「いやほんと危なかった、さっきの攻撃をかわされるだけでなく、反撃までしてくるとはな、おかげでこれまで使う羽目になった……やっぱり代表候補生は侮れないな」

「感心するのは結構だけど、これからどういつつもりなのかな、まさかその武器しかないと言わないよね？」

「それはないな、一夏じゃあるまいに」

不意に出た一夏という単語に、こんな時だというのに少しドキッと

「ほら、隙だらけ」

(しまっ)

慌てて身構える前に

龍也は後退していた。

(え……?)

今度は素で困惑した。

その間に、龍也は前に瞬時加速を放ち、後退しながら上昇していく。

(い、いけない!)

慌てて距離を詰めようと、瞬時加速をしようとした時

「きゃっ!?!」

左右から衝撃が走った。

それは龍也が後退する前に投擲した二振りの短剣、干将・莫耶だった。

弧を描くように飛んでいき、シャルロットの背後から狙うようにされていった。

「くっ!」

何とか体勢を立て直し、ハイパーセンサーで龍也の居場所を確認する。

(いた!)

ここから直線距離約1キロ、当然銃は届かない。

(あの距離から一体)

「ちゃんと避けるよ?」

また開放回線からの龍也の言葉。

ハイパーセンサーで確認できる龍也は、半月状の何かをこっちに向けていて

(まさか!?)

直感ですぐさま後退する。

その直後

もといた場所が、光に包まれ、爆発する。

「なっ!？」

そこには、一本の矢が刺さっていた。

それを中心にして、穴がさながらクレーターのよう広がっていた。

そうしている間にも、光の矢が次々と飛んでくる。

「弓!？」

龍也は弓で、シャルロットを攻撃していた。

(ロックされていない……目算で射ているということか……厄介だね……)

しかも、あんなに遠くに相手がいたのでは反撃しようもない。

今はなんとかかわしてはいるものの、それにだって限度はある。

(このままじゃマズい……何とか距離を……無理をしても詰めないよ……)

距離を詰めるため、動こうとした時、ちょうど真上から、光の矢がシャルロットを囲むように一斉に地面に突き刺さった。

「ぎゃああ!？」

その矢は、さっきの様に爆発はしないものの、これではシャルロットは身動きが取れない。

弓を構えつつ、近づいてくる黒天。

「チェックメイトだな」

「……そうだね………」

三度聞こえる、龍也の声にシャルロットは負けを認めざるを得なかった。

6話・それぞれの問題……

(あー……、やっちゃまった……)

1人で悩んでいる龍也。

あの子の授業も、女子ズに追われながらというデンジャラス？な事になりつつも、つつがなく…… (龍也的にそう思いたいだけが) 終わってクタクタなのである。

で、今龍也がいるのは寮の部屋。
1人で住むことになってるのだ。

一夏と同じ部屋で、住めば一番良かったのだが。

実際一夏にも部屋は一緒なのかと訊かれたが、別の部屋があると言っておいた。

専用機持ちが悪い

という理由だ。

自分がいるだけで、邪魔になるのは明白だった。
それに、正直まだ死にたくはない。

専用機持ちによってたかってボコられたくもない。
というわけで、1人で部屋にいるわけである。

で、何を悩んでいるのかというと

「つい浮かれてしまった……」

さっきの模擬戦の事である。

まあ適当にやって花を持たせてやるうとかエラーソーなことを思っていないながら俺は一体何をやってるんだ。

思い返せば思い返すほど、自分の馬鹿さ加減に自己嫌悪してしまう。

しかし、このままでは一向に思考が進まない。
仕方ない、とりあえず放棄しよう。

というわけで、その事を考えるのは一時中断。
た、棚上げしたわけじゃないからなっ！

そしてやっと、ISについての反省に入った。

一番問題なのはやはり自分の操縦の腕だ。

まあ、家を飛び出してから3年、マトモに使っていなかったの
でしょうがないとは言えましょうがない。

なんとか感覚を取り戻していかなければならないが、ま、そう急務
でもないだろう。

ゆっくりと取り戻せばいい、時間はまだまだあるのだ。

と、なるとやはり問題は

「どっしたのかな、はあ」

やはり最初の問題に戻ってくるわけで

コンコンッ

ん？

「龍也、いいか？」

一夏の声だ。

「ああ」

何の用だ……？

疑問には思ったが、とりあえず開けることにした。

「ちよつと邪魔するぜ」

「お、おじゃまします……」

あれ……？

「シャルロットも一緒なのか？」

「ああ、さつきバツタリと会ったから」

「じゃあなんで俺の部屋に来てんだ……」

「？ 龍也に用があったからだけど……」

「もういい、一夏の朴念仁度はだいたいわかった」

「なんだよそれ」

「ボ、ボクはそんなんじゃ」

「わかったわかった、とりあえず座れ」

「も、もうっ」

とりあえず、立ち話もどうかと思うので、座らせる事にした。

2人を座らせて、お茶を淹れに行く。

一夏には緑茶、シャルロットには紅茶でいいだろう。
種類は適当なものを入れた。というか袖夏のやつ……いつの間にか
んな量の紅茶の葉入れやがった……。

あんまり紅茶は好きじゃないって知っていたはずなのに。
話は変わるが、お茶を入れるのはそれなりに時間がかかるわけで
つまり手持ち無沙汰になったわけなので

一夏とシャルロットの様子をこっそり伺う事にした。
理由？面白そうだからにきまつてる。

台所から、様子を見してみる。

「……………」
「……………」

ダメだ、お互い微妙に気にしてて何とも言えない雰囲気になってい
る。

しかし、一夏の朴念仁ぶりにも呆れたものだ。

こんな広い寮で、バツタリと会うわけないだろうに……シャルロッ
トは待ち伏せしてたに決まつてる。
という事は、一夏に用があったに決まつてる。

っと、とか思ってる間にお湯が沸いたな。

これで、あらかじめ温めておいた湯のみとカップに入れて……

「はい、どうぞ」

「サンキユ」

「ありがとう」

「で、用事というのは？」

「ああ、それは……」

一夏が急に真剣な顔つきになる。

コイツ、こんな顔も出来るのか……。

「龍也、ISの特訓に付き合ってくれないか？ というより、頼む」

頭を下げる一夏。

隣のシャルロットは驚いている。

「……はあ」

何かまた面倒な事になるかも知れないと考えると、ため息がでてしまった。

「……はあ」

龍也のため息が聞こえてきた。

どうやらすんなりと付き合ってくれるわけではなさそうだ。
だが、簡単に引き下がるわけにはいかない。

仲間を守る

そのための力を手に入れるまでは

「……………何を焦ってたんだ」
「……………は？」

龍也が何を言っているのかが、一瞬わからなかった。

「焦ってる……………？俺が？」
「自覚もないのかよ……………」

やれやれと頭を振る龍也。

「俺の操縦技術が一朝一夕のものだとも思ったのか？」
「……………」

そんな動きではなかったのはわかった。
だが

男で初めてISを動かした

とこののであれば、龍也がISに乗り出したのは確実に俺より後
そこまで考えてふと気付いた。

「……………何年……………かかった？」

「一夏？」シャルが不思議そうに言った。

そうか

日本が

龍也が

その事実を”公にしていない”という事なら

龍也の技術も、俺が世界で初めて男でISが使えるという前提も成り立つ。

「2年だが、まあ地獄だったな」

「2年……」

「一夏には、まだ3年もあるだろ」

「……」

「時間はある、優秀なコーチもいる。こんな事言いたくはないけどな、俺からみれば羨ましい環境にいるんだぜ。それで充分じゃないか」

シャルの方を見て言う龍也。

「そんな、優秀だなんて……」

恥ずかしそうにうつむくシャル。

それは龍也の言うとおり、シャルは間違いなく優秀なコーチだ、自慢してもいいと思うけど。

「……そうだな、龍也の言うとおりだ。焦ってもしょうがないよな」
「そうだ、焦る必要はないんだ。
みんなを守るため、少しずつ頑張ればいいんだ。」

「こんな用事だけのために時間とらせて悪かった」
「いや、いい時間潰しになったさ。……ああ、そうそう。ちょっと待ってくれ」

そう言っただけで席を立ち、ベッドの上にある鞆を探り出す龍也。
「一体何を……。」

「あつたあつた。はい、訓練付き合えないお詫びと言うのは変な気もするが……これやるよ」

と言って取り出したのは、とあるテーマパークのチケット（2人分）だった。

「これは？」

「2人で行ってこいよ、ちょっと都合あわなくていらなくなったんだ」

「ふえっ！？い、いいの？」

「こんなどうでもいい話に巻き込まれたんだ、一夏に付き合ってもらえ」

「ど、どうでもいって……」

でも、シャルからすれば関係ない話だったのは確かな事か。

「そうだな、臨海研修が終わった後にも一緒に行くか」

「う、うん……」

顔を赤くしているシャル。
そんなに嬉しいとは、龍也には感謝だ。

「じゃあな、龍也」

「お休みなさい」

「ああ、じゃあな」

そうして帰ろうと背を向け

「一夏」

龍也に呼び止められた。

「……どうした？」

振り返って見た龍也の目は、真剣そのものだった。

「仲間を守る力が欲しいなら、俺を目指すな」

「どうしてだよ、龍也を目指す事のどこが」

どこが悪い　とまでは言わせてくれなかった。

「俺の手に入れた力は、守りたいと願った人を、守ってはくれなかった」

「!?!?」

「言いたいことはそれだけだ、じゃあな」

「お、おい!」

ボタン

閉められた扉をたたき呆然と見るしかなかった。
一体龍也は

「一夏？」

不思議そうに顔を覗き込んでくるシャル。

「あ、いやなんでも……」

「ふーん……」

上機嫌なせいか、あまり深く詮索はしてこなかった。

そんなにあのネズミがいる某テーマパークに行きたかったのだろうか。

つて、そっぴや臨海研修の用意がまだ出来てないな……よし。

「シャル、付き合ってくれ」

「えっ……」

「よつと……」

一夏たちが帰り、また暇になったので、とりあえずベッドに横になった。

今日1日、転入した直後というのもあって意外に疲れてるのかも知れない。

そのまま睡魔に身を任せようと

）

……携帯が鳴っている
ちなみに、着信音は悪いリンゴだ。
これでわかってくれる人はわかってくれると思っている
白になったり黒になったりするのだが、この際それは関係ない。
問題は、とるor無視の2択なのだから。

……

面倒だったが、結局とることにした。

ピッ

「もしもし」

「あ、龍也。電話でるの遅い！」

「はいはい、お休み」

「うん、おやす……って待ちなさい！」

「ナイスノリッツ」

「そ、そうかな？」

「ああ、お休み」

「どっただけ寝たいのよー！」

「少なくとも、この時間は睡眠時間にあてたい」

「彼女に対する言葉とは思えないわよ……」

「彼氏としてマトモに扱われた覚えもないけどな、柚夏」

相手は柚夏だった。

「し、失礼ね！」

「自分の胸に手を当てれば自ずと……ああ悪い、胸無かったな」

「う、うわああああん」

あ、しまった。

安眠を妨げられたせいか、つつい……。

「ヒドい、ヒドいよっ！ 人が気に病んでる所を何の躊躇もなく！」

「恨むなら、俺じゃなくてこの睡魔と自分の発育にしてくれ」

「い、いつか大きくなるもんっ！」

「よく聞く捨て台詞だな」

「ぐぬぬ……」

もう少しこれで弄っても面白いのだが、自重することにしてよう。

「で、何の用なんだ？ 柚夏の発育の報告なら間に合ってるぜ」

「その話を振ったのは龍也だよ！」

しまった、これでは全く自重してない。

「そっちの生活はどう？って訊こうと思ったけど、大丈夫そうね」

「大丈夫なもんか、女子しかいないと結構キツイ」

「なに言ってるのよ、まったく……」

コンコン

ん、また客か？

「悪い、誰か来たから一回切る」

「ん、了解」

一旦電話を切り、ドアへと向かう。
今度は一体誰なんだよ……。

「どちら様」

「はい、楯無おねーちゃんの登場だよー！」

ボタン

カギもちゃんとかける。
ふう、これで

ピッピッピ

「 袖夏。悪い悪い、人違いだっ
」

「 じらーっ…! 」

ドアを一刀両断して入ってくるのは、生徒会長の更識楯無その人。
つて、そのドアどうしてくれるんだ。

「 えっ、ちよっと、今女の人の声が 」

「 ……、また明日な 」

「 え、ちよっと龍也!? 待っ
」

ピッ

ついでに電源も切る。

後ろめたいわけじゃない、決して後ろめたいわけじゃない。

「 あはっ お邪魔だったかな? 」

「 自覚はあるんですね、結構な事です 」

「 やっぱりひどーい 」

とか言いつつも、嬉しそうにぐいぐい寄ってくる。

「 それぐらいの勢いで簪にも接してくれればいいんですけどね 」

「 っしっし 」

……

嘘だろ、その反応はまさか……

「……。まさか未だに不仲とか言っんですか」

「て、てへっ」

カックリ肩を落とす。

「そ、その話はまた今度ね」

「はいはい……。で、何か用ですか」

「龍也の顔が見たかっただけよ？」

……さいですか

「じゃあお帰り願いましょうか」

「えゝ、やだゝ」

……

本当に扱いに困る人だ……

「龍也だつてさ、色々言っつことあるでしょ？ほら、おねーちゃんに
どんと話さない！」

「ありません」

はつきりきつぱり言うに越した事はない。
大抵無駄ではあるが。

「またまた、正直に言わないとー、こごうしちゃうんだから！」

言うやいなやいきなり飛びかかって、抱きしめられて全く離れられない状態に。

「ちよ、離れて」

「いいじゃない、私と龍也の関係なんだから」

「ただの姉弟ですよね！」

そうやってしばらくじたばたしていると、やっと離れてくれた。
危なかった。正直義姉とはいえ、体の発育が申し分ない楯無にはちよっとドキツとさせられる……。

「もう、姉だと思ってくれてるなら、そんな他人行儀な敬語使わなくてもいいじゃない」

「俺はもう更識の人間じゃありませんから」

その声は自分でもはつきりとわかるほど冷たいものだった。

「……そう」

これまでとは全く違う雰囲気で呟く姉の顔は、向こうをむいていて見えない。

「戻ってくる気はない……っってことね」

「……すみません」

正直、あの事件以来戻りたいと思った試しはない。

「いいのよ、龍也の好きなようにすればいいから」

そう言っつて、こっちを向いた姉の顔は寂しそうに笑っていた。

ツーツーツー

携帯から聞こえてくるのは、無機質な音ばかり。

「これは一大事よ……」

柚夏は真っ青な顔で携帯を握りしめた。

6話・それぞれの問題……（後書き）

久々も久々、4ヶ月ぶりの更新です！

皆さん、お久しぶりですー

えー、IS7巻が発売ということで、更新しました。
微妙も微妙、ホントに少しだけ簪にふれてみました

さてさて物語の方ですが、

まさか楯無に妹がいたとは

完全に予想外で、主人公を楯無の（義）弟という設定をしていた俺
はちょっとマズツた気がします

今更変えるのも嫌でしたのでそのまま押し通しますがw
変な所も出てくるでしょうが、見て見ぬふりをしていただけると有
り難いです。

それでは皆さん

更新はまた同じぐらい先になるでしょうが、生暖かい目で見守って
ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0054o/>

IS<インフィニットストラトス> ~ 漆黒の使い手 ~

2011年9月6日18時30分発行